

# 物づくりにそして人作り



## 水との出会い

テクノ・モリオカ株式会社

森岡 雄一

日本経済とそれを取り巻く環境変化が下請け型企業の存在理由、経営基盤を大きく変動させて久しい。高度成長時代、東北は豊富で勤勉な労働力、比較的安価な土地、そして製造設備等を効率よく稼働する人員を雇用する力を持ち、取引先の意向と製品仕様を忠実に守り維持することができれば適正な利潤を得ることが可能であった。単純な電子機器の組立などのいわゆる労働集約的産業はこれまでは地方の労働力によって支えられてきたといっても過言ではない。そして近年、この過去の形態は同じ理由で海外の生産拠点にその目的を求めている。

物の豊かさが生活の豊かさを満たした時代から他人とは出来るだけ違うものを必要だけ、たくさん選択肢から購入すると言う消費者の生活そのものの変化が企業活動の変革の方向を示している。

電子機器の製造は十四年前自分自身の生業としてスタートした。現在も我が社の事業の大きな柱としている。

当時は何もかもお客様に教えて頂きながらの仕事で、よく相手にして頂いたものと感謝している。したがって業界や経営に関する事はまったくの素人で、毎日の受注をこなす、明日の仕事を確保する事のみで精いっぱいであった。今考えてみると良くやったと言う気もするが、空恐ろしいように感じることもある。

二年間町内の車庫を借りていたが、周りが住宅地であったことから毎日夜中まで車の出入りが在るなど「がたがた」働いていたために苦情があり、工業団地の一角に小さなプレハブのような社屋を建てた。

この時の資金がどこからも借りる事が出来ず自分の力不足を心底感じた。安普請で発注先のトラブルがあり建前の当日に材料が揃わないありさまで、近所の方々の助力でようやく完成したようなものであった。完成後、苦情主のご主人がお祝いの酒を届けてくださったことがうれしかった。

電子機器の基板組み立ても少しずつ軌道に

乗り自社の設備にも多少の工夫を施しながら取引先に提案できる生産工程の改善に努めてきた。当時の社員はいろいろな境遇、家庭環境の個性豊かな人たちで、ドラマありハプニングありだったが、「ここぞと言ったときのパワーはどこにも負けないものがあつた。

年中無休二十四時間営業のような仕事でよく一緒に苦楽を共にしてくれたと思つて社員に感謝している。今も当時の社員からOB会の案内を受け毎年出席させてもらっている。水との出会いは工業団地に移転してから一年程後、ある外資系の有力フィルタメーカーより水質センサー及びコントローラーの開発依頼があつたことだった。こちらもまったく未知の世界であつたがチャレンジさせてもらった。試行錯誤があつたが試作品がたまたまうまく完成して採用して頂き製品を量産化することが出来た。

この売り上げと利益の中から技術者を一名採用、わずかながら自社に技術らしい部門を設けた。この時が水との出会いであり、水に



関する技術が育ち始めたスタートだった。現在この分野の技術者を中心に十余名のメンバーが在籍している。中には県外者も多数いて当地に定住する者もいる。

「水」に関しては数年前の全国的な渇水、阪神淡路大震災、O157問題より注目を集めるようになって来たように思う。

水は実に不思議な物である。地球上にあまねく存在するが大変な変わり種だ。唯一の無機質の液体。液体のほうが固体、つまり氷より密度が高い。固体・液体・気体の三つの状態を持ち合わせる化合物となると水しかない。また強力な溶剤でもある。例えばガラスのコップに水を入れて一億年経つとガラスは水に溶けてなくなる。このようにあらゆる物を溶かし込んでしまうとと言う特異性は温泉水のような安らぎの水と共に人間が作り出した

化学物質をも溶かし込んでしまう。何物も水の力を逃れる事は出来ない。無色にして無味無臭。乾いた砂にさえ一五%の水分を含んでいる。地表の七%までが水に覆われている。

水の状態の水分は土星の輪やハレー彗星の核内で発見されているし、気体状ならば微量であるが火星の大気圏にもあるとされている。しかし、液体状のこの水はこの銀河系のどこにも存在しないようだ。Dr. Lyell Watsonが言ったように、まさに「地球は水の惑星」と言える。

私たちの身近なところでは生活用水、工業用水、農業用水とあるが、地下水、伏流水、河川水等、私たちが利用できる水は地球を潤す一三・五億立方メートルのわずか三%未満に過ぎない。また、人の体は約六六%が水分であり、ギリシャの賢人タレースは「水は万物の根元である」と説いた。

現在、水質管理計器や医療用の高度精製水製造装置の開発製造を中心にこの「霊妙にして素晴らしいもの、水」に関わることは大変幸せであると感じている。

我々は現在電子機器の電子基板の組み立てを中心に水にかかわる分野の二つの異なった事業部門を持って県内外から取り引きして頂いているが、そのいずれもが人と人とのご縁としか言いようの無い出会いによって始まり、教えられ、支えられて来た。

たくさんのお会いの中から自分なりに学んだことを中心に、社員と共に自分も成長したいと念じ毎月その思いを文章にして社員にメッセージをおくっている。

地方の企業にとって、地域に根ざした企業でありながら、中央の企業との従来の従属的

な関係から情報や技術を発信でき共栄共存の出来る企業に発展することが、今自分たちに求められている課題である。

そのためには、新しい技術と共にたゆまぬ技術革新で貢献できる企業であること。社員一人ひとりが仕事を通じて生きがいを感じ、生き生き働くことが出来る企業であり続けること。これらのことを企業活動の行動判断基準とし、地域に貢献できる地元企業を目指し、自己革新を続ける人と共に歩んでいきたいと考えている。

## 森岡 雄一

テクノ・モリオカ株式会社代表取締役。  
昭和29年8月20日生まれ。  
山形県長井市成田1479。  
家族：妻と長女、長男、次男、母。  
山形大学工業短期大学部機械工学科卒。  
1983年8月 テクノ電子として創業。  
1985年8月 テクノ電子有限会社設立。資本金500万円。  
1989年8月 テクノ・モリオカ株式会社、資本金1,000万円。  
1991年8月 資本金2,000万円に増資。  
1992年度 通産省中小企業技術改善補助金（超純水中の微量全有機物の検出モニター）  
1993年度 山形県テクノポリス財団補助金（水質センサー）  
1996年度 山形県中小企業新分野進出企業補助金。  
1998年1月 資本金4,950万円に増資。

